

横丁における猥雑さの数値化 —新宿「思い出横丁」を事例として—

○廣田 大智〔東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科 観光レクリエーション研究室〕、
栗田 和弥〔東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科〕

「横丁」は表通り（表の歩道・路地）から横に入った通り・町筋のことであるが、本論ではその中でも現在、飲食店街を中心に形成して「横丁」と名を付した一帯と定義し、ノスタルジックな雰囲気を楽しむことができる横丁は他とは違う雰囲気であることの根拠を探ることを目的にする。日常的にも訪れることは可能であるが、特に近年はソーシャルネットワークシステム（SNS）でシェアされる被写体となることから、外国人観光客も訪ねるようになってきている。調査対象地には都内の横丁の中で代表的といわれる東京・西新宿にある「思い出横丁」とした。ここは、店の入口を開放しっぱなしにしている場合も多く、狭い路地をさらに狭くしている要素を含むことが体験的には判明していることにより選定した。

今まで様々なアプローチでの研究成果があるが、狭さ（間口の長さや路地の幅員その他）を具体的に調査し、検証をした事例は見いだせないことから、狭さをキーワードに現地調査を実施した。その結果、表通りに面した（横丁の外に向いている、比して歩道が狭くない）店に対し、横丁の内に向いている（表通りに面していない、比して路地が狭い）の店は間口（=店内の面積）が狭い傾向にあることを数値化により示した。

福島県鮫川村におけるバイオマス資源を利活用した地域資源循環に関する研究

○岡田優美 入江彰昭 町田怜子 麻生恵

過去の文献（2008）に堆肥バイオマスの視点から福島県鮫川村を事例として、バイオマス利活用による地域循環資源の数値化を実践した例がある。2011年3月に東日本大震災が発生し被害を受けた結果、それ以降放射能の影響で堆肥バイオマスに活用している地域資源の使用が制限されている。さらに過去の文献から期間がかなり経過しており現在のものは存在しないこと、過去の論文後に堆肥バイオマスセンター（有機の郷土）が設立されたなどの変化がみられた。そこで、震災後の地域資源循環がそれ以前と比較してどうなされているか、また、規模の違いによって資源提供に違いが見られるのかを分析・集計し、現在の里山管理の地域資源循環を明らかにする。

調査結果から、東日本大震災の影響で放射能を受けたこともあり、それ以前と以後で使われる資源等に違いがあり、過去の文献と比べても今後の資源循環に変化が見られた。また、大小の規模の違う畜産農家の比較・分析を行うことで、その規模の違いから資源循環のための資源提供割合が異なる傾向がみられた。